



三島由紀夫短篇全集 4

真夏の死

三島由紀夫短篇全集 4

真夏の死

昭和46年 4 月20日 第1刷発行

著 者 三島由紀夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21／郵便番号112

電話東京(945) 1111 (大代表)

振替東京3930

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定 価 650円

© Yōko Hiraoka 1971, Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

0393-135348-2253 (0) (文1)

目次

箱根細工	7
椅子	27
死の島	37
翼	49
離宮の松	60
クロスワード・パズル	74
真夏の死	92
美神	132

江口初女覚書

旅の墓碑銘

急停車

卵

不満な女たち

花火

あとがき

138

150

169

190

202

220

233

装幀

横山
依岡
昭三

明

真夏の死

三島由紀夫短篇全集 4

箱根細工

丹後商會は写真を商う店である。銀座西七丁目であつて、裏通りの地味な店構ではあるが、銀座に二十年つづいている店はそうたくさんとはない。主人は二代目である。先代が地歩を築いて、昭和初年の不況時代に、勇敢に銀座へ進出したのである。

丹後商會の慰安旅行は年に二回、盆暮に行われた。店員六人と番頭一人と主人との野郎ばかりの八人連れで出かけるのである。先代がはじめたこの行事は、銀座進出五年目以来の吉例であつた。一回も参加を欠かさない唯一一人の人間である番頭の吉村は、そのたびごとに目的地の選定や宿の連絡に忙殺された。

彼の意見は、ややもすれば風雅に傾くのだつた。で

きることなら京都まで足をのばして寺々のお庭を拝見し、お茶の点前にあずかり、ついでのことにどこぞの閑寂な懷石茶屋で、句会の一つももちたいのであつた。しかしこの意見は主人や店員たちの手きびしい反對に会つた。実直さと客扱いの老練さとで店に欠かすことのできない人物であるが、番頭のとりすました似非風流にはみんなが閉口していたのである。彼の氣取りは、この春に生れてはじめてダブルの背広を誂えて以来ますます募つたが、若いころヨイトマケをしながら五人の子供を育て十年前に大往生をとげたおふくろのことを話すのに、「私の今は亡いお母様が……」とあるとき言つたのには顔負けであつた。

衆議は箱根行に一決した。

七月半ばのことである。一行は火曜の朝はやく発つて芦の湖へ行き、そこで舟遊びや水泳に午後を過ごし、日暮に強羅へ下りて宿屋でどんちゃんさわぎをやらした上、一泊して朝十一時の開店に間に合うように銀座の店へ帰ればよかった。

旅立ちの朝は、夜明けと共に今日の一日の暑氣のけはいを漂わせはじめていた。八人はそれぞれ店から割

引で売ってもらった写真機を肩から下げ、平日のこととて空いてゐる沼津行の列車に乗り込んだ。吉村はみんなの切符をあらためて預かった。落されては厄介だからである。切符と引替に、主人から命ぜられて買った放出のチョコレートとキャラメルとチューインガムと煙草の「光」一函と三宝柑一ケとを紙袋にまとめて入れたのを、一袋ずつ配ったので、うけとった店員たちは、窓際の主人にむかつて、一人一人袋をかがけて軽く目礼した。

松原秀夫は店員のなかでもいちばん目立たない色の黒い小柄な若者であるが、子沢山の丹後家の書生を兼ねているこの子飼の店員は、年はまだ二十一の童顔なのに、大そうませた考えをもっていて年長の朋輩も一目置いていた。新入りは煙りたい番頭から符牒を教わるよりも、まず秀夫に教わるほうを選んだので、この眼鏡をかけた尤もらしい童顔の古参兵は自然と重きをしたのである。

秀夫はどちらかというと、野球を見るよりは小説を読むほうが好きであった。一通りの運動はでき、腕などは逞しいが、野球にだけは怨みがあったのである。

中学の時右手の小指を球で突き指をして、そのために小指が不自由になったばかりか、目立つほどではないが、すこし形が変ってしまったからである。彼は女の子と話すたびにこの指に気づかれたら嫌われると思うので、隠そうとして無理な手つきをする。そこで却って、「小指をどうかしたんですか」と詮索される羽目になった。

彼は正義派で実直で、お店のことにかけては、まちがっているとなると主人にでも喰ってかかった。卸商から店に貼ってくれるようにたのまれていた新製品のポスタアを、ある晩のこと店じまいのあとで泥酔した主人が、鯉魚の一軸に見立てて、見得を切つて、そのあげく危うく破つてしまひそうになったことがある。秀夫はその手からポスタアを奪いとつて背中に隠した。そして酔漢の顔を真正面から見据えて、先代以来恩義をうけている卸商の主人の名を叫んで、

「マスター、そんなことをなすつて川村さんに悪くないんですか！」

と半ば泣声で言つた。この純情な諫言に酔いをさました主人は数日後、秀夫をゆくゆくは吉村の後釜に

坐らせるために、その会計の仕事の見習に任命した。

つまり秀夫の中には健全でたのもしい庶民道德しよみんとうとくが生きていたのである。流行に押されてアロハじみた仕立の薄色のシャツを着ているけれども、この青年は曲ったことが大きらいだった。友だちに借りた本は必ず二三日うちに返したし、財布を落せば、人にたよるのがいやさに、丹後家まで一里以上の夜道を歩いてかえって来たことがある。正義感を押し売りするところが玉に疵きずだったし、そのためにヤアさん（街では与太者をこう呼んでいる）と要らぬ喧嘩けんかをすることもあった。

暗い横町でからかわれている花売り娘に同情して、騎士道精神を発揮したのである。こういう腕力沙汰わんりきさたは活動写真なんぞでは大いロマンスの端緒たんしよになるのであるが、後難を怖れて逃げ出した花売り娘は、秀夫の顔をよくおぼえていなかったのだ、二三日あとで街で会ってもおそらく顔をしておりすぎた。あいにく彼女も秀夫とおなじ近眼だったが、お洒落から眼鏡をかけていなかったのである。一方喧嘩をはじめるとき眼鏡を予め外して納なっていた秀夫の顔は、眼鏡をかければ相好さうこうがかわっていた。こうして眼鏡がお互いを路傍

の人間に立戻らせてしまったのは、人生とわれわれとの間にいつもこういう眼鏡のような邪魔物が登場するという教訓を、秀夫が得るためには好都合であった。

ところで秀夫は二三日前から風邪気味である。病気を隠して職務を遂行するという殊勝しゆしやうで悲愴ひさうなうずうずするような初々はつはつしいうれしさは、戦争中の勤労動員以来彼の病みつきになっていたが、これは今日も同様だった。皆が揃って行く慰勞旅行は、丹後商会の年中行事であり、彼に言わせれば、「大事にすべき世間の付合」であつたので、秀夫はなんだか頭痛がして体がゆらゆらするような気がしながら、今朝の出發に加わつたのである。

小田原で箱根登山電車に乗りかえると、強羅の終点に近づくにつれ、温度は東京のしのめどきの涼しさに戻って行った。沿線の崖の風にあおられて紫陽花あじさいの一株一株が、窓外を擦過さかして、都会の児等の目をみはらせた。紫陽花はまるで汽車がのこしてゆく煙の白い固まりのように、車窓をつぎつぎとあわただしくかすめたのである。

「紫陽花の異名いみょうを七変化ななへんずと申すそうですが、

こうして窓の外にぽかぽかとあらわれる様子というものは、まったく変化でございますなあ」と番頭が言った。

「変化って何ですか」といちばん年下の店員がきいた。「あれ、変化知らないの？ 講談本よんだことないの？」

「お化けのことだよ」と四十に手が届かないのに頭の禿げかけた、開襟シャツ姿の気さくな主人は言った。

「諸君が箱根でお化けに会わぬように、お化け代表が仁義を切りに行つて下さるんだ」

吉村一人はきよんとしていたが、のこりの若い六人は爆笑した。「お化け」という吉村の渾名を知らないのは御当人だけだったのである。

やがて強羅についた一行は、つい一ト月ほど前に開通した早雲山ケーブルに乗り込んで、烏帽子のように屹立している早雲山麓の終点で下りた。そこからバスが芦の湖へ連絡している。

芦の湖畔の中餐は、吉村の予算の倏約で、銀座で買つて来たジャムパンの弁当と茹卵である。往きの車中吉村がしきりと氣にしていたのは、ゆるく結えためり

んすの風呂敷のなかに割れないように丹後商会の包紙を三枚も重ねて包んだ茹卵の安否であつた。目的地に来て茶店の卓にひろげられた風呂敷からは亀裂ひとつ入っていない八個の茹卵があらわれたので、みんなは快哉を叫んだ。吉村がまず一つを割ってみると、卵は石のように茹っていて、正午の湖畔の光のなかにそのつややかな乳白色の裸身をあらわした。

芦の湖では宿屋に立寄らない予定であつた。そこで一同は、茶屋の奥の間で着ていたものを脱ぎすて、泳ぎの支度をした。秀夫も負けん気でみんなに倣つた。やがて打揃つて湖の水に身を浸したとき、彼は足にふれる水草のみどりに、ふいに予感のような寒氣を感じた。岸にかくには小柄な鯉が泳いでいた。夏の光に背中をあたためて、死んでうかんでいるかのような黒いげんごろうは、泳ぎ手の波紋が近づくと、忽ち生きかえつて水底へ舞い下りた。まるで贗物みたいに完全な形をした富士山が湖面にゆらめいている。

秀夫は体が悪寒といりつくような熱に引裂かれると思ひながら、強いて抜き手を切つて朋輩に負けまいとした。そのうちに頭上の太陽が頭を光の錐でえぐるよ

うな錯覚が起きたので、とうとうこらえかねて岸へ戻った。彼の唇は色を失っていた。茶店で将棋をさしている主人と番頭の白いシャツがまざり合つて見える。

秀夫はよろめきながらこれに近づく、ようやく奥の畳敷の部屋に辿りついて、濡れた体をそこに横たえた。主人と番頭がおどろいて立上った。

——秀夫は四十度ちかい熱だったので、強羅の医者に見せるために、その夏支度の肩を毛布で包まれて、一足先に番頭と一緒に強羅の前以て決めてあつた宿へ向つた。折角の慰勞旅行のたのしみをそこなわないように、湖心へ泳いで行つた連中がかえるまでは、この突発事件を内緒（ひそひそ）にしておこうと主人は考えた。連中は秀夫が何かいつもつまらぬ義理立てを思い出して岸へかえつたと思つていないのであらう。五人の泳ぎ手の水脈（みづな）が少しのためらいも不安もなしに遠ざかるのを主人は見たのである。

秀夫は肺炎の疑いがあつたので、ペニシリンの注射を打たれた。宿の離れのやや閑静（かんせい）な一室に彼は寝かさ

れたが、もう一方の端の部屋ではのこりの七人がどんなにさわぎをやつていたのである。

このどんなにさわぎを予定どおりやらかすには異論（いろん）があつた。みんなが秀夫の病気を心配していた。もちろん近年の發明にかかるこの特効薬の偉力を信じているわれわれは、肺炎だからと云つて以前のようにあわてはしない。しかし別の部屋で友だちが苦しんでいるのに、こちらの部屋で陽気にさわいでいるというのは、気持のよいものではない。

「しかし予定は予定です」御幣（ごへい）かつぎの吉村が言つた。「これは吉例です」からな。十五年来、この旅行が病人のために中断したことは一度もございません。やるだけのことはやろうじゃないか、諸君。私もお店のために、涙を吞んでしばらくこの席を離れないから、離れの病人の世話はこの中で戦争中衛生兵をやつておつた八木君に委せて、みんなでやるだけやろうじゃないか、諸君」

とこうするうちに彼が苦心の予算の花々しいとつきの項目（こうもく）である、三人の温泉芸妓が座敷へあらわれた。若い虚栄心が、忽ち陽気な拍手を彼女たちに浴（も）せ

た。鳥子と鹿の子ときよりの三人はコの字型に坐った七人の前を小まめに動いて酌をはじめた。八木はいかにも残り惜しかったので、任務をあとまわしにして一献を受けた。

炭坑節が出るのは大そう早かった。というのは、この芸妓が弾ける曲目は限られていて、何をきいても弾けないというので興ざめると、それでは炭坑節にしようと言うから申出たのである。

主人は立上って廁へゆくふりをした。秀夫の見舞に行こうと思ったのである。廊下に出て宿の女中と何か相談していた鹿の子はその姿を見ると、

「どこへ行くの、旦那」と無邪気にあとをつけてきた。

ふりむくとまだついてくる。

「怪しいわよ。お便所（と彼女は言った！）もお風呂ももうとおりましたわよ。若い人たちを置いて殺生よ。いいわよ、あたしがつけて行って尻尾をつかんであげるから」

鹿の子は髪を夜会巻のようなアップにしていた。体がいかにもしこしこしている。強羅の夏の浅宵はお座

敷着も暑くはない筈なのに、涼しげな水いろの縹ぢりめんをいかにも暑そうに着ているのは、要するに着方が下手なのである。その固太りの体をまるで小包にして発送するかのような融通の利かない着方をしていた。

鹿の子は決して美しくはない。しかし平易な顔立ちである。漁師の娘にでもありそうな単純で強気な顔立ちである。化粧をしていなかったら、その顔は実に簡素な造作で成立っているのが見られた筈だ。

「ねえ、ねえ」

と肩にかけた指は大そう強く、主人は思わずよろけて、その指につかまった。すると痛いものが手に触れた。

「おや、指環だね」

「ダイヤだわ」

ダイヤの指環なら、そう訊かれるまで黙っているほうが値打が増すのであるが、鹿の子はすぐにそう答えた。この即答はいかにもいじらしく、自分ならダイヤをはめていても硝子にしか見られないという負け目が云わせるのである。

「ほらね」

彼女は手をおかけて廊下の電燈の下へもって行った。

「よく光るでしょう。あたりがきらきらするでしょう」

「ほう、大したもんだね」

主人はろくすっぽ見ないで相槌を打った。それから離れの唐紙に手をかけて、

「すぐ行くから、君は座敷へおかえり」

「いやいや、ここまで連れて来て、薄情もの」

睨むと瞳が真黒で、色気よりも一段と強い、精氣と謂ったものが迸り出るように思われる。

「病人だよ。嘘だと思ったら入ってごらん」

これ以上大きな声を出されると病人にさしさわると思った主人はどうとうこう言った。

病室には宿の女中が一人ついていて筈であったが、一寸用足しに行っていると見えて、姿がなかった。病人は黒っぽい肌色に赤みのさした、煮つまったような顔をして眠っていた。顔がいつもより少し小さく見えた。

主人のうしろから鹿の子は病人の顔をのぞきこんだが、依然として立ったままで、両手を頬にあてて、

「まあ」と言った。

「先生、もう呼んだんですか」

「呼んだよ」

鹿の子は主人から事情をきくと、病人は動かせず店は忙しいので、明朝秀夫一人を置いてのこりは帰京する予定だという。

「だってもし重くなったらどうするんです」

「あしたの朝の容態でね」

鹿の子はようやく畳に坐った。考えるときには坐らなければならぬ。病人の顔をじっと見ていたが、眼鏡を外した秀夫の寝顔は、やや間のびがして見えるのと同時に、ふだんよりあどけなくも見えた。鹿の子はしばらくそうしていると、急にこう言った。

「あとはあたし引受けましたわ。昼間は商売もないし、看病ぐらい出来ますわ」

「そりゃ気の毒だ」

「いいんです。本当に」

鹿の子のその場の出来心をとめてみたところで仕様

がない。こんな小僧っ子のどこに興味をもつのだろうと主人は訝（いぶ）かしたが、病人はどのみち三四日もいれば汽車に乗れるようになるだろうし、その短かい間の看護なら大したいざこざも起るまいし、第一篤志看護婦なら金のほうも助かるし、頭から反対しそうな吉村には相談しないで、主人は鹿の子の申出をうけ入れた。あくる朝鹿の子が浴衣を着て宿の秀夫の部屋へやって来たのは、すでに十時を過ぎていたので、丹後商会の一行は二時間も前に発って行ったあとであった。

朝の秀夫の枕もとへやって来たのは、彼のまだ見たこともない女である。

洗い髪を束（むす）ねて、浴衣に鄙（ひび）びた赤い帯を締めている。枕もとへ来るとこう言った。

「あたし看護婦よ、お宅の旦那からたのまれたんですの。治（な）るまで毎日通って来ますわ。お茶飲みます？」

彼女は番茶を入れた湯呑みを取りあげてこう言ったが、秀夫は首を振った。

硝子戸は閉められていて暑い。簾（すだれ）には淡竹（はちく）の影が映っているが、コンクリート仕立の岩石峨々たるわざと

らしい庭は風を通さない。それは書割のような庭なのである。

秀夫は芦の湖のあの死のような澄んだ水を思い出した。彼の高い熱はそれを欲した。

そばに控えている彼女は何だか知らないが、今朝早く発（は）った朋輩たちのことを考えると、あの時刻から先はどうも記憶があいまいなように思われる。

商売柄（しやうばい）談話（だんわ）もいうけれども、鹿の子は概して笑わないうつた「看病」という犠牲的な行動に対する好奇心でいっぱいになっていた。

秀夫はいきなり胸へ冷たい手をつっこまれてびっくりした。熱さましが利（き）いて来たので、彼の胸は汗ばんでいた。

「あらまあ」と鹿の子は、洗い物をしまいわすれた女のように頓狂（とんきやう）に叫んだ。「大へんな汗だわ。拭（ぬ）かないと毒（どく）だわ」

女中（にようぢゆう）を呼んで代りの浴衣とタオルをもって来させると、彼女は秀夫の浴衣を脱（は）がせた。客の着物を脱（は）がせるような手馴れた職業的な脱（は）がせ方である。それは尤